

# 音学シンポジウム 2020 開催にあたって

森勢 将雅<sup>1,a)</sup> 大石 康智<sup>2</sup> 高島 遼一<sup>3</sup> 小川 哲司<sup>4</sup>  
小山 翔一<sup>5</sup> 寺島 裕貴<sup>2</sup> 藤島 琢哉<sup>6</sup>

概要：2013年から開催している音学シンポジウムは本年で8回目の開催を迎える。本稿では「音学シンポジウム 2020」について、実施の主旨や今後の展望について述べる。

## 1. はじめに

「音学シンポジウム」は、音に関するあらゆる学術分野をターゲットとして、シングルトラックによる招待講演とポスター形式による一般講演によって構成される学術イベントである。2013年5月に初めて開催され、本年は8回目の開催となる。本稿では、音学シンポジウムの企画動機・趣旨の振り返りと現在に至るまでの変遷から、本年度のシンポジウムの概要について説明する。その後、本シンポジウムの将来の可能性について述べる。

## 2. これまでの音学シンポジウム

第1回目の音学シンポジウム 2013は、情報処理学会音楽情報科学研究会 (SIGMUS) [1] の20周年記念企画の1つとして企画され、2013年5月11, 12日にお茶の水女子大学で開催された。この企画は、画像処理分野において日本国内で最大規模のシンポジウムである「画像の認識・理解シンポジウム (Meeting on Image Recognition & Understanding: MIRU) にインスパイアされて実現されたものである [2]。これまでの音学シンポジウム全体で踏襲されている基本コンセプトは、

- 音・聴覚・言語に関するあらゆる分野を対象とすること
- シングルトラックによって進行すること

の2点である。大規模な学会では、分野やトピック単位でセッションが区切られ別々の会場でパラレルセッションとして開催される。本シンポジウムでは、あえて様々な分野を束ねてシングルトラックにより進行することにより、

表 1 これまでの音学シンポジウムの変遷

開催年	日時	開催場所	ポスター発表数
2013	5/11-12	お茶の水女子大学	51件
2014	5/24-25	日本大学	66件
2015	5/23-24	電気通信大学	61件
2016	5/21-22	東海大学	37件
2017	6/17-18	お茶の水女子大学	47件
2018	6/16-17	東京大学	53件
2019	6/22-23	京都大学	56件

分野間での議論・交流をより活性化させようという狙いがある。

表1は、これまでの音学シンポジウムの開催日時、開催場所、ポスター発表件数を示す。各回概ね12件の招待講演・チュートリアル講演が企画されており、ポスター発表件数は延べ370件以上となる。また、音学シンポジウム 2016では「MIRU 連携オーガナイズドセッション」が企画された。これは、MIRUと連携し、音と画像それぞれの研究者が

- (1) 信号処理と逆問題
- (2) 認識と変換
- (3) 応用とインタフェース

からなるトピックについてトークバトルをするものであり、大変盛況であった。

## 3. 本年の音学シンポジウム

本年の音学シンポジウム 2020は、6月6日、7日にヤマハ株式会社開催される予定である\*1。2014年の音学シンポジウムより、MUS以外の多様な意見を積極的に取り入れるため、実行委員会を立ち上げ協賛研究会から1, 2名ずつ参画する形式を採用している。2018年より音声言語情報処理研究会 (SLP) [3] が主催研究会に加わり、MUSと

\*1 コロナウイルスの影響を鑑み、原稿執筆時点ではオンライン開催を前提に準備を進めている

<sup>1</sup> 明治大学  
<sup>2</sup> 日本電信電話 (株)  
<sup>3</sup> 神戸大学  
<sup>4</sup> 早稲田大学  
<sup>5</sup> 東京大学  
<sup>6</sup> ヤマハ株式会社  
a) mmorise@meiji.ac.jp

表 2 音学シンポジウム 2020 実行委員会

委員長	森勢 将雅 (明治大学)
副委員長	大石 康智 (日本電信電話 (株))
副委員長	高島 遼一 (神戸大学)
委員	小川 哲司 (早稲田大学)
委員	小山 翔一 (東京大学)
委員	寺島 裕貴 (日本電信電話 (株))
委員	藤島 琢哉 (ヤマハ株式会社)

SLP との共催研究会の形式となった。2020 年からは、音声研究会 [4] が連催 (学会が異なるため共催という表現は使わないが、実質的には共催と同じである) となり、MUS, SLP, SP の共催研究会の形式となった。また、以下の研究会 (電子情報通信学会 応用音響研究会 / 日本音響学会 電気音響研究会 (EA), 日本音響学会聴覚研究会 (H)) が協賛研究会となっている。表 2 は、実行委員会のメンバー一覧である。

音学シンポジウムでは、招待講演の理解を促進するため、招待講演とチュートリアル講演を組み合わせることができるよう構成にするとともに、チュートリアル講演 + 招待講演、招待講演のみなど柔軟な対応ができるようにした。本年は、招待講演者として以下 7 名の方々に招待講演をお願いすることとした (発表順、敬称略)。

- 西村 雅史 (静岡大学)
- 川口 洋平 (日立製作所)
- 前澤 陽 (ヤマハ株式会社)
- 大道 竜之介 (ヤマハ株式会社)
- 福田 隆 (IBM)
- 浜中 雅俊 (理研 AIP)
- 中島 祥好 (九州大学)

チュートリアル講演については、招待講演をより深く理解することを狙い、招待講演者との調整を経て以下 2 名の方々にお願いした (順不同、敬称略)。

- 古川 大輔 (中央病院)
- 松原 正樹 (筑波大学)

ポスター発表は、申し込み時点で 34 件の申し込みと例年よりも 20 件ほど少ない件数であった。本年度の特色として、本年度に限定した「エキシビジョンポスター枠」の設定が挙げられる。コロナウイルスの影響により 2020 年 3 月の学会が中止となり、多くの方々が発表機会のみ失われることになった。音学シンポジウムでは、このようにすでに予稿を提出済みで発表機会を損失した方に限定した枠を設け、追加の原稿執筆無しで発表できる特別な枠を設定している。エキシビジョンポスター枠には 29 件の申し込みがあったため、全体での件数は 63 と、最終的には例年よりもやや多い発表件数になっている。

## 4. これからの展望

これまでの開催を通して、音学シンポジウムは関連分野

において高い認知度を有している。本年度はイレギュラーな対応を余儀なくされており、例年の傾向とは大きく異なるシンポジウムになることは避けられないと考えている。オンライン開催になった場合、招待講演やポスター発表をどのように管理するかなど、多くの課題があるが、開催日までに可能な限りスムーズな運用ができるよう取り組んでいきたい。

現在は、研究会の在り方そのものから議論される時代であり、音学シンポジウムについてもより良い姿を模索する必要があるといえる。例えば、本シンポジウムの口頭発表は全て招待で構成されているため、一般講演が全てポスターとなっている。毎年実施しているアンケートにも口頭発表の一般枠についても要望があることから、本シンポジウムに適した口頭発表のスタイルについては検討する必要があるように思われる。

## 5. おわりに

「音学シンポジウム」は今年で 8 回目を迎え、チュートリアル・招待講演を組み合わせせた柔軟なスタイルを作るなど、マイナーチェンジを経て現在の形に落ち着いてきた。例年いくつかの課題がありマイナーチェンジをしているが、本年度は例年とは異なる対応を含むシンポジウムとして実施することになるだろう。現段階ではどのようなシンポジウムになるかを説明することはできないが、今回のシンポジウムをきっかけに、研究会の実施方法の見直しを含めた新たな事例の蓄積になればと願っている。

## 参考文献

- [1] 情報処理学会 音楽情報科学研究会 (MUS), <http://www.sigmus.jp/>
- [2] 亀岡弘和, “「音学シンポジウム 2013」開催にあたって,” 情報処理学会研究報告, 2014-MUS-103-1 / 電子情報通信学会技術報告, IEICE-SP2014-1, May 2014.
- [3] 情報処理学会 音声言語情報処理研究会 (SLP), <http://sig-slp.jp/>
- [4] 電子情報通信学会・日本音響学会 音声研究会 (SP), <https://www.ieice.org/sp/jpn/>